太陽

杉山　千里

あれは　この崖を照らしているように見えますが
ただ　照らしているだけ
熱をもたない　光りです
いのちがみんな滅びて　光りは乾き
凍りついてしまったのです

かつて　太陽の光りは
この星をあたため
あまねく　命を愛する
なつかしく　やわらかなものでした
そして　はどよい湿りをもっていました
それはこの星に生きる　すべての生命の呼気が
光りにあたえていたのでした

あたためる力を失った太陽は
すべての生命の滅び去った星を
もう　何億年も
照らしつづけています

死

杉山　千里

真夜中　人間のいとなみの気配が消えると
水を張ったボールの中でひしめき合う仲間たちは
そっと殻を持ち上げ
新しい水を味わいながら
かやかやと話しはじめた
砂の中に暮らしていた　昨日までを
心地よい波の音
駆けてゆく子供たちの足音
漁船のエンジンの響き
……日差しは　なかなか良いものだつた
話しは尽きることなく
やがて郷愁に変わっていった

ぼくは　何も語らなかった
生まれた時から体が弱くて
ここに来るまでに　消耗してしまった
ぼくには
砂の中の暮らしも
満ち引く潮も　日差しも　つらかった
ここの水は硬くて
呼吸するたびに　やわらか過ぎる体は蒔けてゆく
それでも　あたらしい水が飲みたくて
けんめいに殻を持ち上げたけど
もう　力尽きてきた

ぼくは最後に　大きく息を吐き出すと
二枚の殻を　ぴたりと閉じた
闇には慣れている
このせまい世界こそ　ぼくのやすらぎ
短かったいのちを　小さな殻に封印すると
しずかに目を閉じた
殻はもう　どこにも無い
ぼくのたましいは　自由だ
仲間たちの声が　ゆっくり遠ざかってゆく

狂気

ひとりで　死んだ
誰も　缶司つかなかった
姿も声も　失った
誰にも見えない　透明なたましいになった

ここにいるよ
誰か　気がついて　ふりむいて
気つく人はいない
姿も声も　無いのだから

知っている人たちが　笑って立ち話
友だちは　夢中でかくれんぼ

夕食の支度をしている　お母さん
仕事から帰ってくる　お父さん

お母さん　お父さん　ぼくはここだよ
透明なたましいは　ふたりの周りを
何度も何度もとびまわる
こわいよ　こわいよ
気がついて　ふり向いて
こんなに呼んでいるのに
こんなに　叫んでいるのに
呼びかける　叫ぶ

夜がきて　家々は明かりを灯す
お母さんと　お父さんは　夕食のテーブル

そしてすべての人が眠ってしまった深夜
もうどこにも家はない
道も　町も　何もない

たましいは　風の野を飛びまわる
赤い三日月が　西の闇に沈んでゆく

たましいは　なにも感じなくなってゆく
ぼくはこれから　永久に　虚空をさまよう